

3.出屋敷遺跡発掘調査報告

1.はじめに

今回の調査は、京都府建設交通部が実施する平成24年度加茂駅前線(第2工区)地域自主戦略交付金(街路)業務事業に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

調査地は、木津川中流域に開けた加茂盆地に位置する。地域の主要道路である加茂駅前線は、JR大和路線(関西本線)加茂駅から盆地を直線的に東西方向に横断する。また、駅前には道路拡幅工事が進んでいるが、盆地の西部は道幅が狭く通行車両と歩行者の分離も難しいため、交通のネックとなっていた。このため、道路整備が早急に望まれることから今回の事業が計画されることとなった。

調査地は、弥生時代から奈良時代の遺物が採集されている出屋敷遺跡の北辺に当たる。また、恭仁京跡の左京域に含まれるとともに、恭仁宮朱雀大路(推定)の延長に位置する。今回は、道路の拡幅に伴う調査であり、対象範囲が東西に広いことから、北東部(I区)と南西部(II区)に分けて調査を実施した。

出屋敷遺跡については、平成16年に加茂町教育委員会によって、大野地内で試掘調査が実施されている。3か所のトレンチのうち、西端付近に設定された第1トレンチでは西に高まる砂の堆積が認められ、自然堤防の東端部が確認された。また、自然堤防の東側では木津川に由来する礫層が広がる状況が確認されている。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会をはじめ各関係機関のご指導、ご助言をいただいた。また、地元加茂町大野区・大野区土木事業対策委員会には御高配を賜った。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府山城南土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保

同調査第2係主任調査員 竹原一彦

調査場所 木津川市加茂町大野地内

現地調査期間 平成24年5月24日～6月20日(I区)

平成24年8月23日～9月14日(II区)

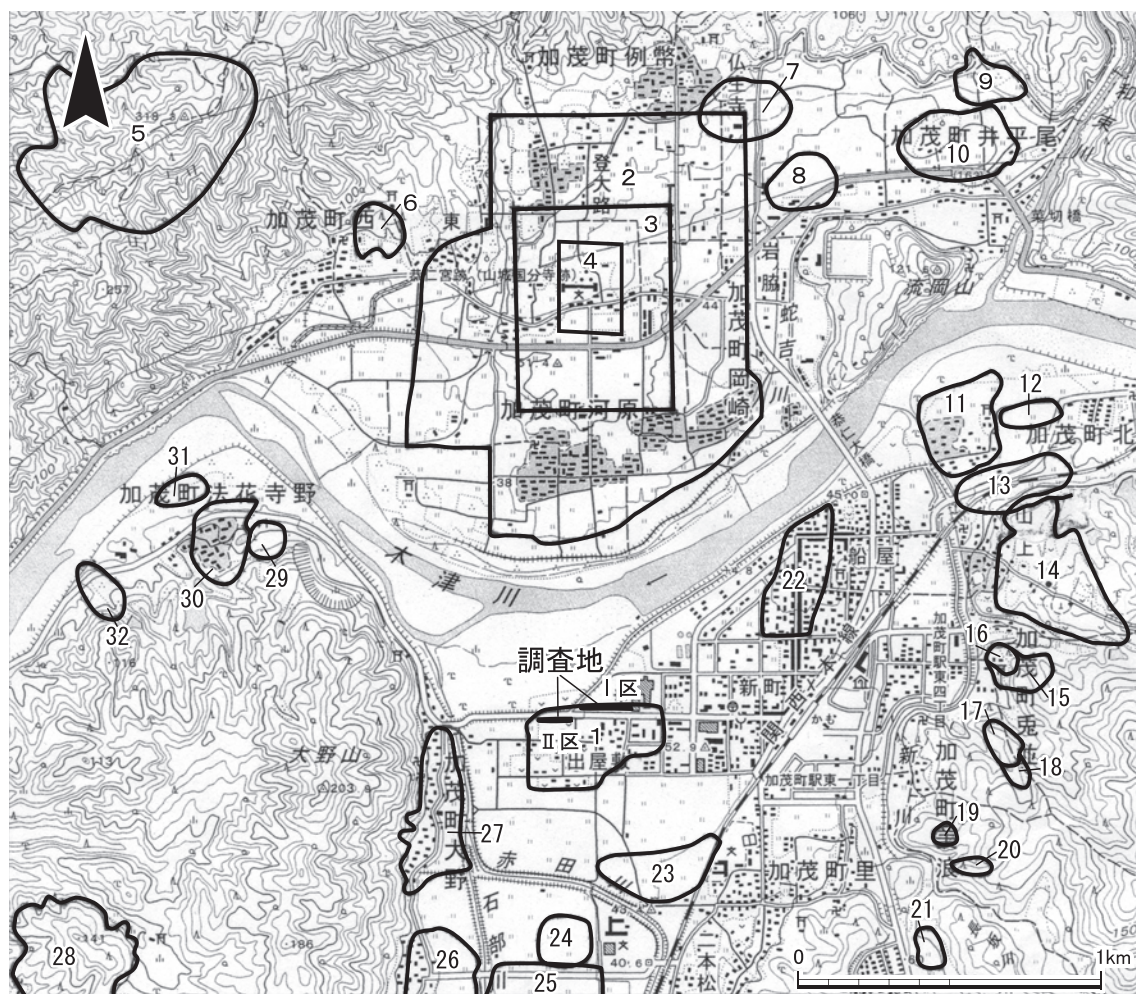
調査面積 290㎡

2. 位置と環境

出屋敷遺跡が所在する木津川市加茂町の歴史を概観すると、古くは旧石器時代にまで遡り、木津川右岸の例幣遺跡から旧石器が出土している。縄文時代の遺跡は少なく、甕原遺跡でサヌカイト石核が出土しているが、土器や遺構は検出されていない。

弥生時代では、西上田遺跡・出屋敷遺跡で石器や土器が出土している。砂原山墳墓では主体部は未調査ながら、墳頂部付近の土坑内から庄内式土器が出土している。

古墳時代に入ると加茂盆地の東側丘陵部に古墳が築かれ、これまでに40基近くの古墳が確認されている。その多くは横穴式石室を有する円墳である。なかでも1981年に発掘調査が実施された前柵古墳群は5基の円墳からなり、特に2号墳では人骨、金環・銀環・水晶製切子玉・ガラス玉・碧玉製管玉などの装飾品、鉄鏃・刀子などの鉄器、土師器、須恵器など豊富な副葬品が出土して



- | | | | |
|------------|--------------|-------------|------------|
| 1. 出屋敷遺跡 | 9. 杉谷遺跡 | 17. 六丁山古墳群 | 25. 横枕遺跡 |
| 2. 恭仁宮関連遺跡 | 10. 中ノ町遺跡 | 18. 寺山古墳群 | 26. 片岸遺跡 |
| 3. 恭仁宮跡 | 11. 大明神・鴨村遺跡 | 19. 石塚古墳 | 27. 山際遺跡 |
| 4. 山城国分寺跡 | 12. 岡田庄窯跡 | 20. 草ヶ山古墳群 | 28. 鹿背山城跡 |
| 5. 蔦城跡 | 13. 大林遺跡 | 21. がんがん堂遺跡 | 29. 植田遺跡 |
| 6. 願応寺跡 | 14. 高塚遺跡 | 22. 船屋遺跡 | 30. 甕原遺跡 |
| 7. 石ヶ辻遺跡 | 15. 灯明寺遺跡 | 23. 西上田遺跡 | 31. 久保遺跡 |
| 8. 平田遺跡 | 16. 灯明寺裏山古墳群 | 24. 石部遺跡 | 32. 法華寺野遺跡 |

第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

いる。同時期の集落跡はこれまでに確認されていない。

奈良時代に入ると加茂町域は大きく変容を遂げる。木津川右岸の銭司には和銅開珎を鑄造した鑄銭司が置かれた。さらに天平12(740)年、聖武天皇は木津川右岸の瓶原の地を新たな都と定めて宮都の造営を開始した。この恭仁京は足かけ5年ではあったが、政治・経済・文化の中心となった。恭仁京廢都後の天平18(746)年、恭仁宮大極殿は山背国分寺に施入され、金堂として使用されている。京域については、天平13(741)年3月には五位以上の高官が恭仁京への移住を強要されたほか、8月には平城京の東西両市を恭仁京に移し、9月には宅地班給が行われていることから、京域も整備された可能性も考えられる。

恭仁京のプランについてはかつて足利健亮氏^(注1)が復原を試みている。足利説では、恭仁京大極殿が国分寺に施入されたという『続日本紀』の記述から国分寺金堂跡に大極殿を設定し、空中写真や地籍図を基に朝堂院プランを推定した。さらに、天平13年9月12日条の「鹿背山西道より東を以って左京と為し、西を以って右京と為す」という記述から、「鹿背山西道」を鹿背山の西側を斜めに走る道路にあてて、鹿背山の東と西に平城京と同規模の左京と右京を配置している。恭仁京の復原については先の足利説のほか、千田稔氏^(注2)・伊野近富氏^(注3)・岩井照芳氏^(注4)も復原案を提出されているが、いずれの説も確証を得られていない。

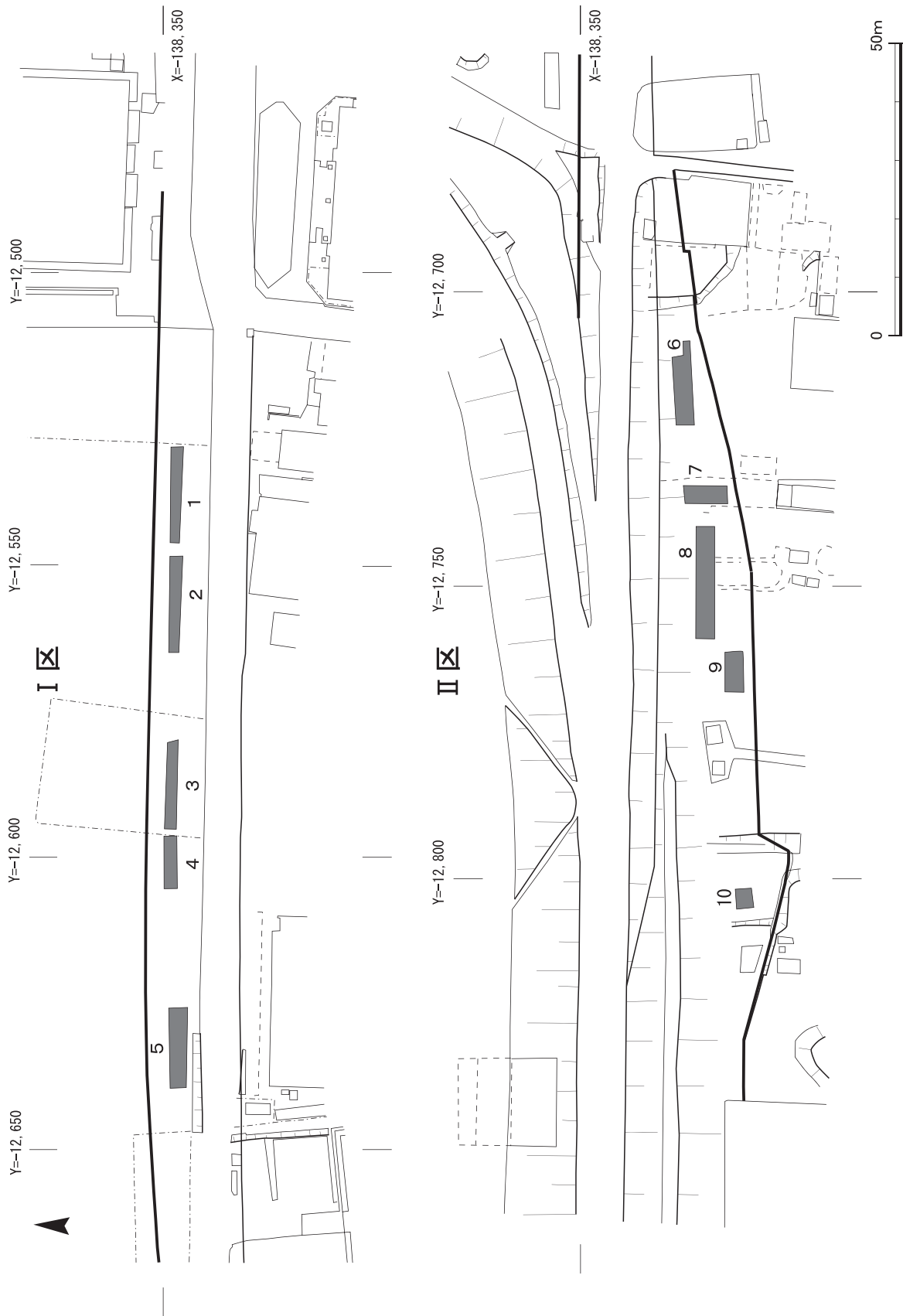
恭仁京以外の遺跡では、鹿背山丘陵の北端部に国分尼寺跡と推定される法華寺野遺跡が所在し、瓦積み基壇の一部や瓦窯(平窯)が確認され、多量の瓦が出土している。そのほか、丘陵部では須恵器を焼いた栗田窯跡・新池窯跡群・小西窯跡群・四反田窯跡・ナマス谷窯跡・三五尻窯ほか、多数の窯跡の存在が確認されている。集落は検出されていないが、この時期の遺物散布地では、中ノ町遺跡・植田遺跡・片岸遺跡・西上田遺跡・石部遺跡・横枕遺跡等が知られる。

平安時代以降、加茂町の南端の小田原の地に浄土信仰に深く結びついた岩船寺・浄瑠璃寺・隋願寺の諸寺が造営される。浄瑠璃寺に代表される加茂町の諸寺は興福寺ゆかりの寺院でもあり、撰関家と結びつく南都仏教の影響も受けている。鎌倉初期には加茂町北端に山岳寺院の様相を色濃く残す海住山寺が再興される。この時期の集落は確認されていないが、遺物の散布地では杉谷遺跡・中ノ町遺跡・片岸遺跡が認められる。

3. 調査概要

調査対象地は大きく2か所(I区・II区)に分かれる。調査対象地の東部で府道北側に位置する部分をI区、調査対象地の西部に位置し、木津川の堤防上を通る府道南側の堤防裾に位置する耕作地をII区とした。現地調査はI区から開始した。I区は東西約135m、幅約10mが調査対象地である。各筆の境界にフェンス囲いやブロック塀が存在したことから、筆毎に1～2か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。I区には5か所のトレンチを設定し、東側から西に向かって第1～5の番号を付けた。排土置き場の関係から、トレンチの幅は2mで設定した。I区の調査面積は合計140㎡である。

I区では、顕著な遺構は認められなかったが、木津川由来と判断される砂と砂礫層を確認した。



第2図 トレンチ配置図

また、主に砂礫層から中世の土器片が出土した。

Ⅱ区は東西約115mを測る。調査対象地は中央付近が最も幅広く約12mを測るが、東西の両端付近では幅約5mと狭くなる。Ⅱ区では5か所のトレンチを設定し、東側から西に向かって第6～10の番号を付けた。また、各トレンチの幅は約3mである。Ⅱ区の調査面積は合計150㎡で、耕作土の下には砂層が厚く堆積する。8トレンチでは近世の土坑を1基検出した。奈良時代から近世の土器と瓦片が出土した。

1) 基本層序

I区は、旧地表の上は1.5m前後の厚い盛土層で整地されており、旧地表面の標高は36.2m前後を測る。旧地表の下には約0.5～1mの厚さで、粒子の細かい灰色系の砂が堆積する。この砂層中には、僅かな量ではあるが近世～近代の遺物が含まれている。さらに砂層の下には川原石(拳～人頭大)による砂礫層が堆積する。砂礫層の上端は標高34.8m(第1・2トレンチ)～36m(第4トレンチ)を測り、西から東方向に下がる傾斜を確認した。狭小なトレンチであることから礫層の底は確認できなかった。第2トレンチは地表から最も深く掘削を行ったトレンチであるが、砂礫層は標高34.4mよりさらに下に続く状況にある。この砂礫層中から中世の遺物が出土している。

Ⅱ区は、中央部から東にかけて自然堤防の微高地であり、現状では畑が営まれている。また、調査対象地の周辺部では、この微高地に多数の住宅が存在する。Ⅱ区の西端部は1段下がった低地となり、水田が広がる。この水田(第10トレンチ部)と畑のある東側微高地(第8・9トレンチ)との最大比高は約3.4mを測る。北西のI区とは堆積土の様相が一変し、Ⅱ区では砂層が厚く堆積する。砂層中には凹凸の著しい薄い暗茶褐色土が砂と交互に堆積する。砂と暗茶褐色土の互層の堆積は、木津川の氾濫による自然堤防の形成に関連する水際における堆積土層と判断される。このきめ細かく薄い暗茶褐色土は、洪水砂の堆積後に一定の乾燥期間があり、その期間中に風雨等によって運ばれて洪水砂の上に堆積したと推定される。水際堆積の最上部は第8・9トレンチで標高38.6mを測り、ほぼ水平に堆積しているが、第7トレンチでは上面が標高38.2mとやや低くなり、東端の第6トレンチでは標高36.9mとさらに低くなる。明瞭に確認できる水際堆積の最下部の標高は第7・8トレンチが38m付近、第6トレンチが36.8m付近である。第9トレンチは標高37.4mまで掘り下げたが、最下部の確認はできなかった。

2) 検出遺構

(1) I区

第1トレンチ(第3図) 東端に設定したトレンチである。トレンチ規模は東西16m、南北2mである。深さは地表面(標高37.4m)から最大2.8m(標高34.6m)まで掘削した。トレンチは壁面崩落防止のため段掘りを行った。トレンチ中央やや西側を排水管が横断していることから、その部分はあぜ状に残して調査した。

断面と平面で遺構の検出に努めたが、遺構は検出できなかった。断面観察では、砂礫層(第9層)

上に堆積した灰色系の砂質土層(第2～8層)では近世～現代の陶磁器片がわずかに出土した。標高35.0m付近から下には、10cm前後の円礫を多数含む淡灰黄色砂礫(第9層)が堆積する。この砂礫層からの出土遺物はない。

第2トレンチ(第3図) 第1トレンチの西側に設定したトレンチである。トレンチ規模は東西17m、南北2mで、深さは地表面(標高37.4m)から最大3.1m(標高34.3m)を測る。トレンチは壁面崩落防止のため段掘りを行った。旧地表面(第2層上面)から0.7m下がった標高35.4mで、中世遺物を含む淡灰黄色砂礫層(第11層)を確認した。この砂礫層は標高34.3mよりさらに深く続くが、トレンチ壁面の崩落の危険性が増したことから、これより下層の掘削は断念した。第9図3～5はこの第11層中から出土した。

中世以前の遺構面は確認できず、木津川の氾濫で既に削られたか、砂礫層(第11層)より下位に存在しているものと考えられる。

第3トレンチ(第3図) 第2トレンチの西に設定したトレンチであり、恭仁宮朱雀大路(推定)の延長から東に35m前後離れたところに位置する。トレンチの規模は東西15m、南北2mで、深さは地表面(標高37.5m)から最大2.6m(標高34.9m)を測る。トレンチ中央付近において朱雀大路の東側溝の検出が期待されたが、遺構は検出できなかった。標高35.3m付近で淡茶灰色砂礫層(第11層)を確認したが、この層の下底面には至らなかった。遺物は出土しなかった。

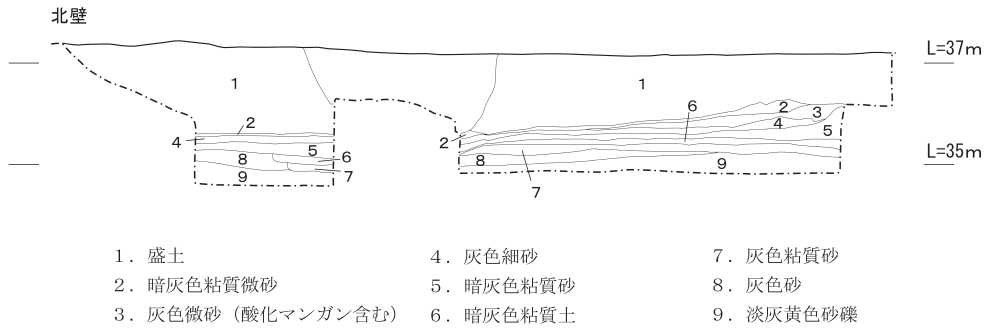
第4トレンチ(第3図) 第3トレンチの西隣に設定したトレンチである。恭仁宮朱雀大路(推定)の延長のやや東に位置する。トレンチの規模は東西約9m、南北約2.5mである。深さは標高35.4m(地表下2.5m)まで掘削した。第1～3トレンチと同様、遺構は検出できず、朱雀大路の路面等の痕跡も確認できなかった。淡茶黄色砂礫層(第7層)の上面は他のトレンチの砂礫層よりも高く、標高36m付近である。淡灰色砂(第5層)から土師器の破片が出土したが時期は不明である。

第5トレンチ(第4図) I区の西端部、第4トレンチから西に約20mの位置に設定したトレンチである。トレンチ規模は東西約9m、南北約2.5mである。深さは標高35.4m(地表下2.5m)まで掘削した。このトレンチでは、西側のII区から続く自然堤防の東裾を確認した。トレンチ中央部から西側には淡黄灰色砂(第6層)や淡茶黄色砂(第4層)が堆積しており、微高地を形成する土層と判断した。旧表土である第3層と第7層の上面の比高は約1mを測る。遺構・遺物は確認できなかった。

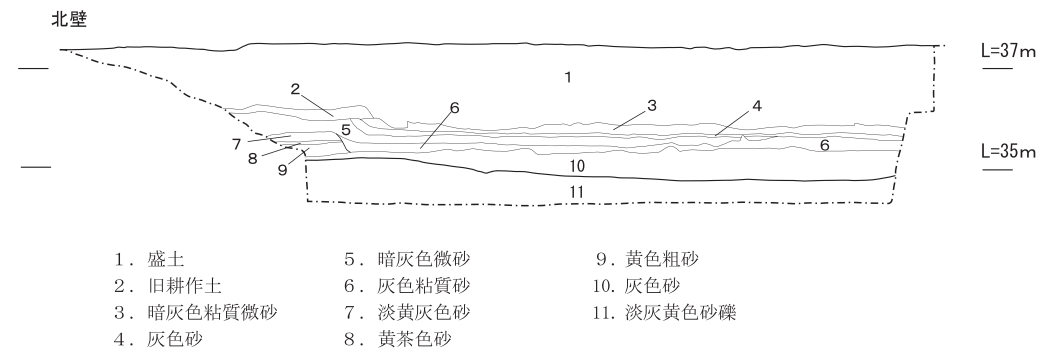
(2) II区

第6トレンチ(第4図) 微高地の畑地に設けたトレンチであり、最高所(第8・9トレンチ付近)から緩やかに東に向かって下がる傾斜地に位置する。トレンチの規模は東西約12m、南北約3mである。深さは地表下2.5m(最深部)まで掘削した。耕作土の下には黄茶色系の砂が厚く堆積する。標高36.8m付近で水際堆積(第8層)を確認した。この水際堆積は、不整形な起伏が連続して存在する砂層の上面に、厚さ0.3～0.5cmの暗茶褐色土が薄く堆積する。洪水砂の堆積後に地表面が乾燥し、その後風や雨で運ばれた暗茶褐色土が堆積したとみられる。水際堆積は厚さ約0.12mを測り、その範囲内に暗茶褐色土と砂が互層に堆積する。この下を0.85mにわたって断ち割ったが、

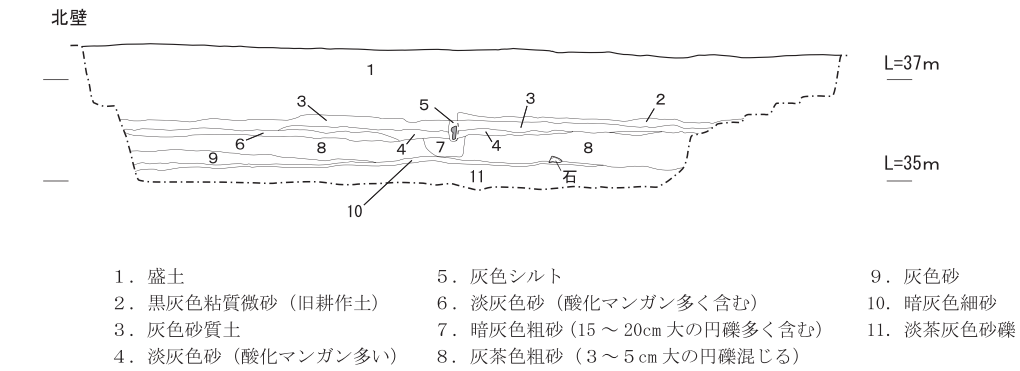
第1トレンチ



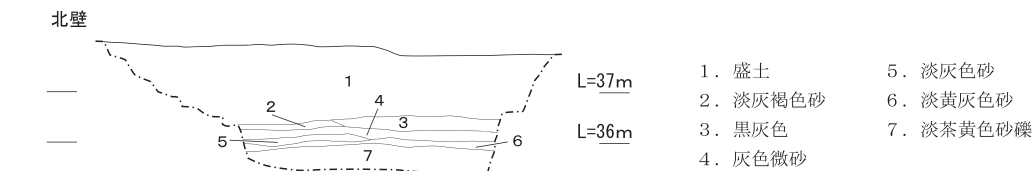
第2トレンチ



第3トレンチ

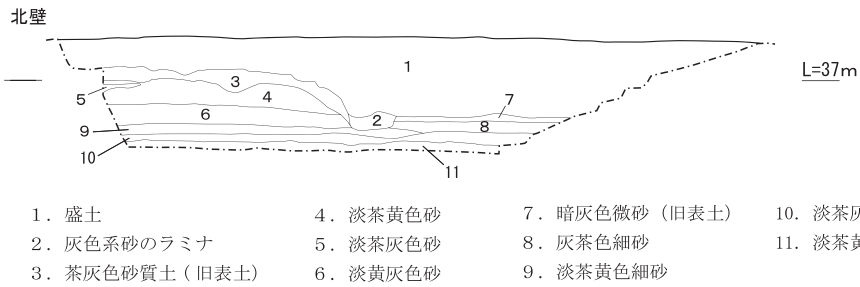


第4トレンチ

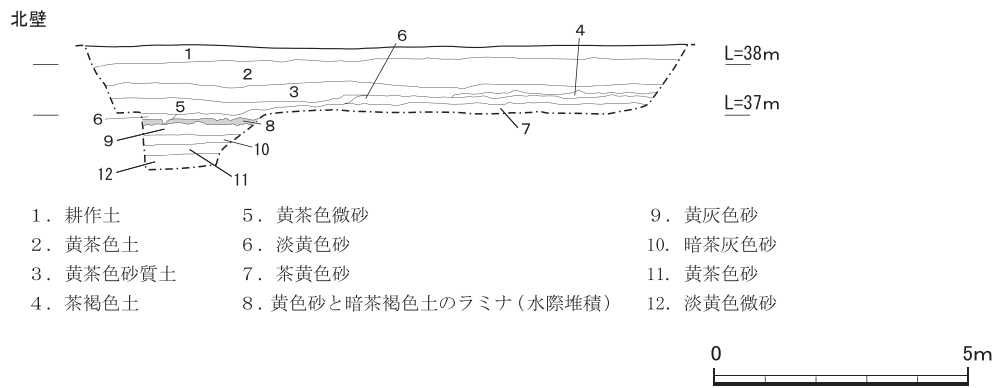


第3図 第1~4トレンチ断面図

第5トレンチ



第6トレンチ

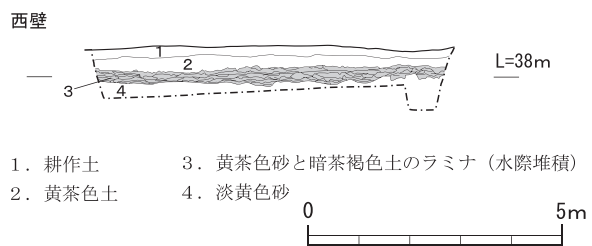


第4図 第5・6トレンチ断面図

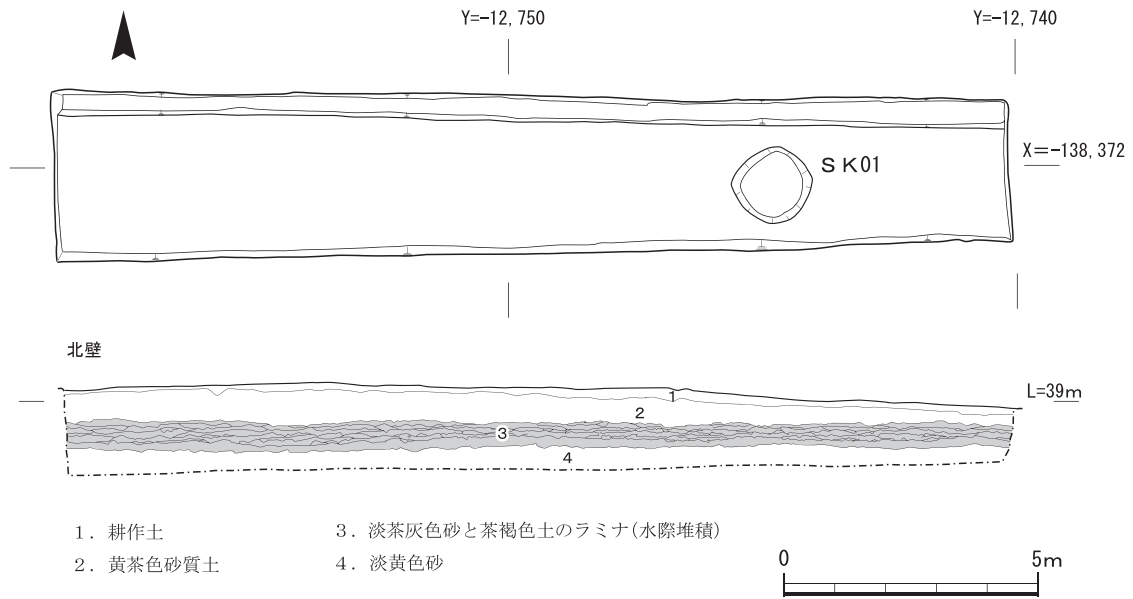
砂層が堆積しており、遺物も出土しなかった。これ以上の掘削は、壁面崩落の危険があるため行わなかった。

第7トレンチ(第5図) 第6トレンチの西側に設定したトレンチである。トレンチの規模は南北7.2m、東西3mで、深さは約1mである。標高38m付近で厚さ約0.3mの範囲に水際堆積(第3層)を検出した。水際堆積は南から北方向に向かって下がる傾斜をもつ。この第3層中から土師器甕(第9図8)が出土したが、遺構は検出できなかった。北端部で断ち割りを実施し標高37m付近まで掘り下げたが、淡黄色砂(第4層)の堆積が続く状況で遺物は出土しなかった。

第8トレンチ(第6図) 第7トレンチの西側に設定したトレンチで、微高地の最高所にある。トレンチの規模は東西19m、南北2.8~3.4mである。ここでも水際堆積(第3層)を確認した。水際堆積の下面は標高38m付近にあり、約0.5mの厚さで堆積している。水際堆積はほぼ水平である。水際堆積のうち、暗茶褐色土を中心に土器や瓦(第9図9~14)が出土した。土器には須恵器・土師器・輸入陶磁器・瓦器があり、7世紀~13世紀と時期幅が広い。これらの出土遺物は標高38.4m付近から出土した。深いところでは地表下1.8mまで掘削したが、崩



第5図 第7トレンチ断面図



第6図 第8トレンチ実測図

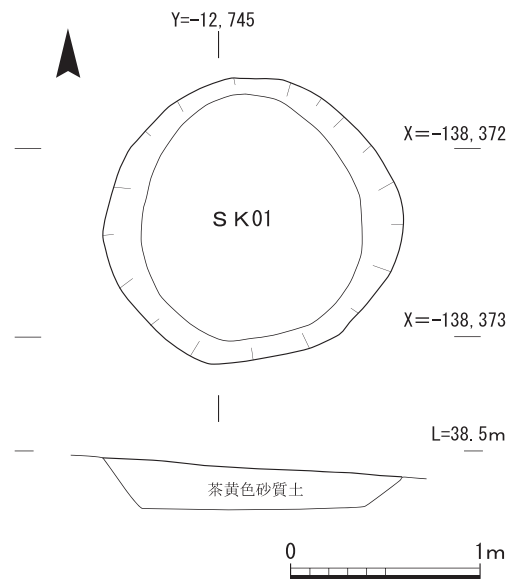
落の危険があったため、それ以上の掘削は行わなかった。

トレンチ東部の中央付近で円形土坑S K01(第7図)を検出した。土坑は直径1.4m、深さは検出面から0.2mを測る。土坑底はほぼ水平である。埋土は茶褐色砂質土であり、土師器の細片が出土したが時期は不明である。掘形が水際堆積を切ることから、13世紀以降の可能性が高い。

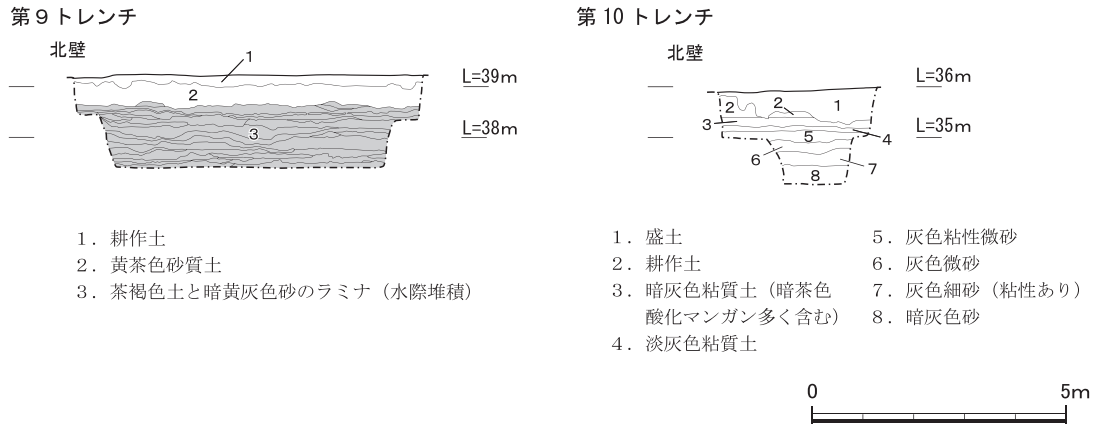
第9トレンチ(第8図) 第8トレンチの南西側に設定したトレンチである。トレンチの規模は、東西7m、南北3mである。遺構は検出できなかった。ここでは、第6～8トレンチで確認した水際堆積(第3層)が厚く堆積しており、上面は標高

38.6m付近である。標高37.4mまで掘削したが、湧水が著しく危険であったため水際堆積の最深部は確認できなかった。水際堆積内の標高38.3m付近から須恵器壺の底部(第9図7)が出土した。地表下1.8mまで掘削したが壁面崩落の危険があったため、それ以上の掘削は断念した。

第10トレンチ(第8図) 微高地から西側に外れた微高地の裾に設定したトレンチである。トレンチの規模は東西3m、南北3mである。深さは1.9m(標高34.1m)まで掘削した。耕作土下にはグライ土壌である灰色・青灰色系の砂層が堆積している。遺構は検出できなかったが、第4層中から土師器皿(第9図6)が出土し、第5～8層からは遺物は出土しなかった。



第7図 土坑S K01実測図



第8図 第9・10トレンチ実測図

3) 出土遺物

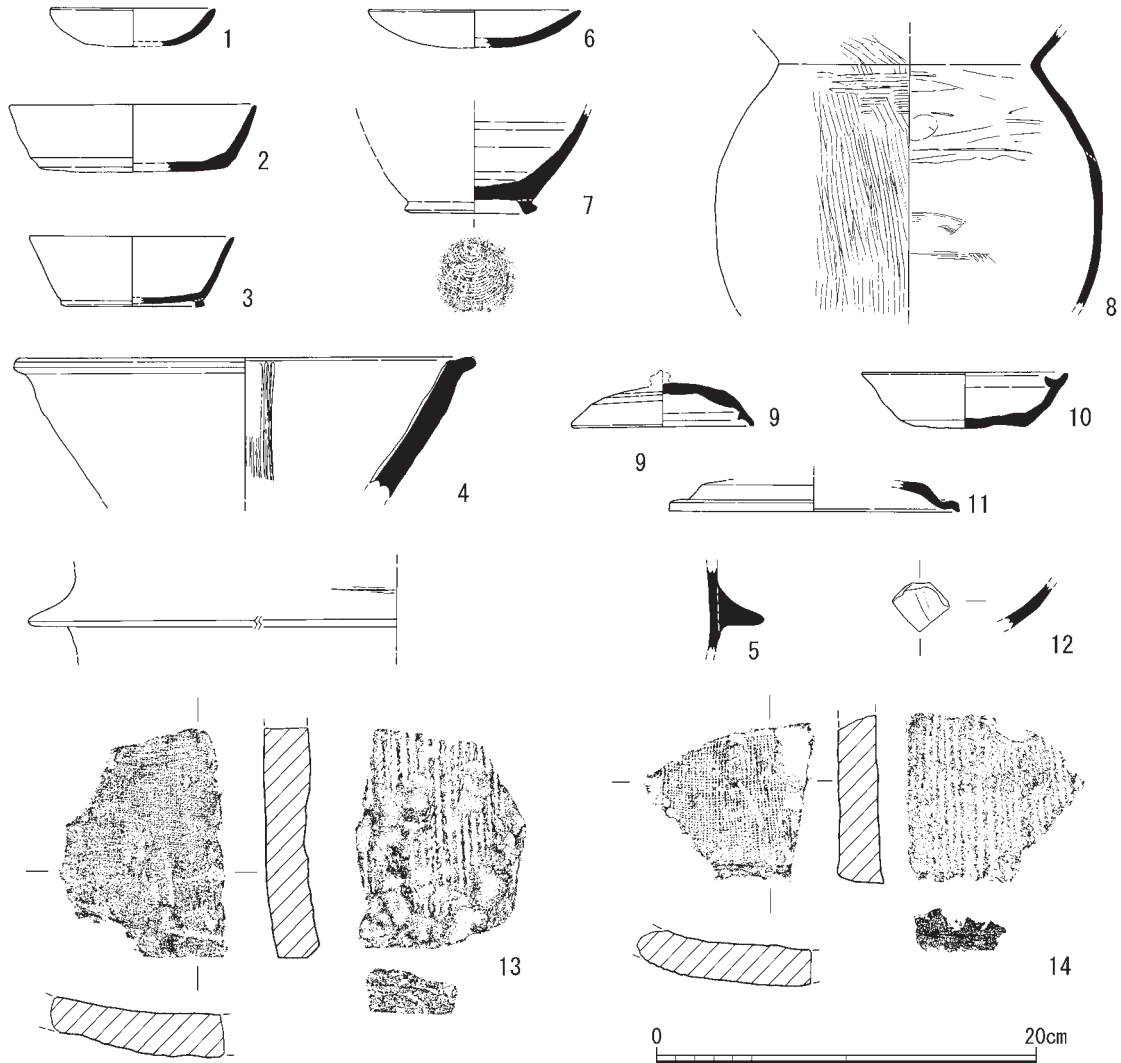
遺物は、7～13世紀の須恵器や土師器などが遺物整理箱4箱分出土したが、水際堆積土層中からの出土が多数を占めている。I区では、第1・2トレンチから遺物(第9図1～5)が出土した。いずれも器壁が摩滅しており、木津川によって運ばれてきた遺物とみられる。第2トレンチの淡茶灰色砂礫層出土遺物(3～5)は摩滅が少なく破片も比較的大きい傾向にあることから、運ばれた距離は短いものとみられる。II区では、第7～10トレンチから遺物(第9図6～14)が出土した。

第1トレンチ出土遺物(第9図1・2) 1・2は灰色粘質砂(第7層)から出土した。1は土師器皿で、口径8.6cm、器高2.0cmを測る。口縁部は肥厚し、端部は丸く納める。2は須恵器の杯Aで、口径13.0cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラ切り未調整である。色調は灰色である。

第2トレンチ出土遺物(第9図3～5) 3～5は、淡灰黄色砂礫層(第11層)から出土した。3は須恵器杯Bで、口径7.6cm、器高3.6cmを測る。体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は丸く納める。底部外縁に高台を貼り付ける。色調は灰色である。4は信楽焼播鉢で、口径24.4cm、残存高は7.4cmを測る。外上方に直線的に立ち上がる体部の厚さは1.4cmと厚く、口縁端部は外方に水平につまみ出し、上端に面をつくる。内面には4本1単位の播り目が数か所に施される。胎土は粗く、6mm大の小石が含まれる。色調は灰白色である。15世紀後半のものである。5は瓦質の羽釜であり、鏝部分のみ出土した。鏝径から推定される口径は約39cmである。鏝の長さは2.4cmを測り、基部から先端部にかけて尖り気味に厚さを減じ、端部は丸く納める。胎土は密で、色調は灰色を呈する。

第7トレンチ出土遺物(第9図8) 8は土師器甕である。水際堆積(第3層)から出土した。口縁端部と底部を欠く。体部径20.5cm、残存高14.3cmを測る。口径は推定約17cmである。口縁部は外上方に立ち上がり、体部は丸みが強い。調整は、体部外面は粗いタテハケ、内面上半はヘラケズリで、下半はナデである。色調は明黄褐色である。

第8トレンチ出土遺物(第9図9～14) 9～14は水際堆積層(第3層)から出土した。9は須恵器蓋である。丸みの強い天上部外面中央に小型のつまみ痕跡がある。口縁部内面にかえりをもつ。口径9.6cm、天井部までの残存高は2.3cmを測る。外面の回転ヘラケズリは全体の2分の1程度



第9図 出土遺物実測図

である。10は須恵器杯身である。口縁部内面にかえりをもつ。口径10.9cm、器高2.9cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整である。11は須恵器杯蓋である。口径15.4cm、残存高1.6cmを測る。12は中国製青磁碗の体部片である。外面に鎬蓮弁が認められる。胎土は精良で、器表面には薄い青灰色釉が掛かる。13・14は平瓦である。凹面には布目圧痕が残り、凸面は縦方向の縄目タタキを施す。器壁の厚さは2.5cm程度である。小片のため図化できなかったが、このほかに瓦器も出土した。

第9トレンチ出土遺物(第9図7) 7は水際堆積層中(第3層標高38.3m付近)から出土した。須恵器壺底部で、高台径6.9cm、残存高5.5cmを測る。底部外面には回転糸切り痕跡を残し、「ハ」の字に開く高台を貼り付ける。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。

第10トレンチ出土遺物(第9図6) 6は淡灰色粘質土(第4層)から出土した土師器皿である。口径11.2cm、器高2.0cmを測る。器壁は5mmと比較的厚く、口縁端部は尖り気味に丸く納める。

4. ま と め

I区では、工場跡地であったことから厚い盛土が確認された。盛土下では、第1トレンチ東端付近から第2トレンチ西端付近にかけて、東西方向約28mの範囲で暗灰色粘質微砂(第1トレンチ第2層)・灰色微砂(同第3層)・灰色細砂(同第4層)が堆積する。また、灰色粗砂中には葎とみられる植物の茎・根が含まれることから、最近まで湿地状の窪地が存在していたとみられる。

第1トレンチでは旧耕作土は確認できなかったが、第2トレンチ西部で旧耕作土(第2層)を確認した。旧耕作土上面の標高は36.2mを測る。

第1トレンチでは標高35.0～35.5mの間は灰色系の砂(第6～8層)の堆積がみられ、その下には木津川由来と考える淡灰黄色砂礫層(第9層)が存在する。この砂礫層は、色調の変化を持ちながらも西側の第4トレンチ(淡茶黄色砂礫：第7層)まで広範囲に認められる。第2トレンチではこの砂礫層中から中世の遺物が出土した。この砂礫層の上面は東から西に向かって高くなり、第1トレンチでは標高35.2m、第4トレンチでは標高36.0mである。東端と西端では約0.8mの比高を測る。

第5トレンチは、西側の第1～4トレンチと土層の状況が異なっている。排土スペースの関係から標高35.6mまで掘削したが、第1～4トレンチで確認した砂礫層は検出できなかった。トレンチの西半部には第1～4トレンチにみられなかった茶色系や黄色系の砂や粗砂(第4～6層)が堆積する。この第4～6層は自然堤防を形成した堆積土と考える。

II区は、自然堤防上にあり、遺構・遺物の存在が予想されたが、検出遺構は近世頃の円形土坑1基のみであった。調査地において、近世以前の遺構は確認できなかった。

第8トレンチでは、ほぼ完形の須恵器(第9図9・10)が出土したが、これらは遺構に伴わず、水際堆積と推測される砂層からの出土である。水際堆積層中では上述の7世紀初頭の須恵器や13世紀の輸入陶磁器(第9図12)が同一面で出土しており、中世段階に木津川の氾濫で運ばれてきたものと判断される。また、奈良時代の須恵器や平瓦が出土しているが、表面がほとんど摩滅していないものもあることから、河川により運ばれてきたとしてもさほど長い距離を流れてきたとは考えにくい。今回の調査地の周辺に当該期の遺構が存在する可能性が考えられる。

また、II区の微高地は周辺部の地形観察結果から第6～9トレンチの東と南に広がる状況が確認できた。このことから出屋敷遺跡の中心部は調査地より南東に所在する現在の集落の下に広がるものと考えられる。

(竹原一彦)

注1 足利健亮「都城の計画について－恭仁京、平安京を中心に－」(『古代日本文化の研究 都城』上田正昭編 社会思想社) 1976

注2 千田稔「平城京、恭仁京復元プランから」(『都城の生態』日本の古代 第9巻 中央公論社) 1987

注3 伊野近富「恭仁京と恭仁宮の復元」(『京都考古』63号 京都考古刊行会) 1994

注4 岩井照芳「泉津と古代都城」(『古代文化』第62巻第2号 (財)古代学協会) 2011

岩井照芳「恭仁京の復元－泉津の下津道を基点とした都市計画－」(『古代文化』第64巻第1号 (財)古代学協会) 2012

圖 版



(1) I 区調査前全景(西から)



(2) 第 1 トレンチ東部北壁土層断面
(南西から)



(3) 第 1 ・ 2 トレンチ全景(西から)



(1) 第3トレンチ全景(東から)



(2) 第3トレンチ東壁土層断面
(西から)



(3) 第3トレンチ西壁土層断面
(東から)



(1) 第4トレンチ全景(西から)



(2) 第5トレンチ全景(東から)



(3) 第5トレンチ西部北壁土層断面
(南東から)



(1) II区調査前全景(東から)



(2) 第6トレンチ全景(西から)



(3) 第6トレンチ西端部北壁
土層断面(南から)



(1) 第7トレンチ全景(北から)



(2) 第7トレンチ南端部西壁
水際堆積土層断面(東から)



(3) 第8トレンチ全景(東から)



(1) 第8トレンチ土坑SK1
(南から)



(2) 第8トレンチ中央部北壁
水際堆積土層(南から)



(3) 第8トレンチ遺物出土状況
(東から)



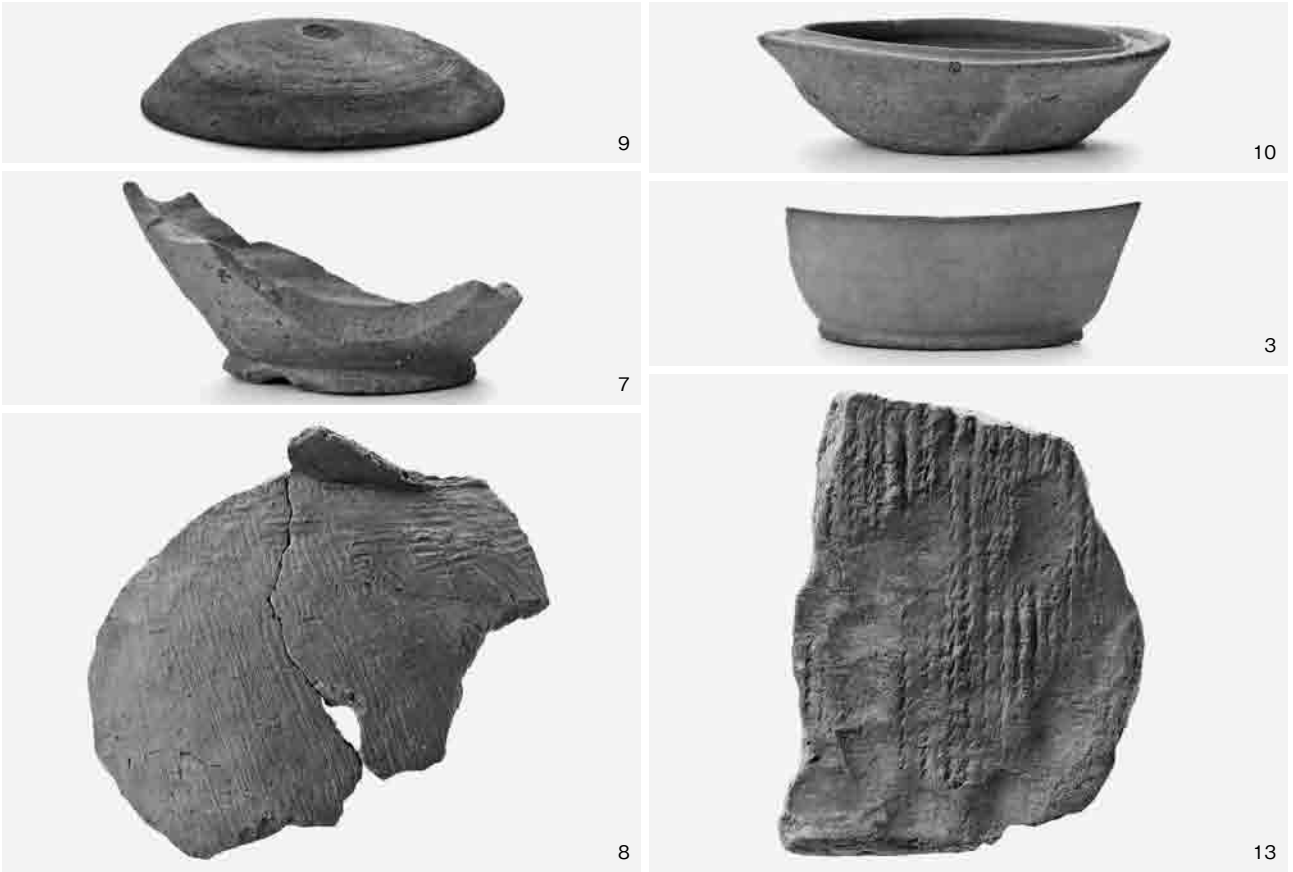
(1) 第9トレンチ全景(北から)



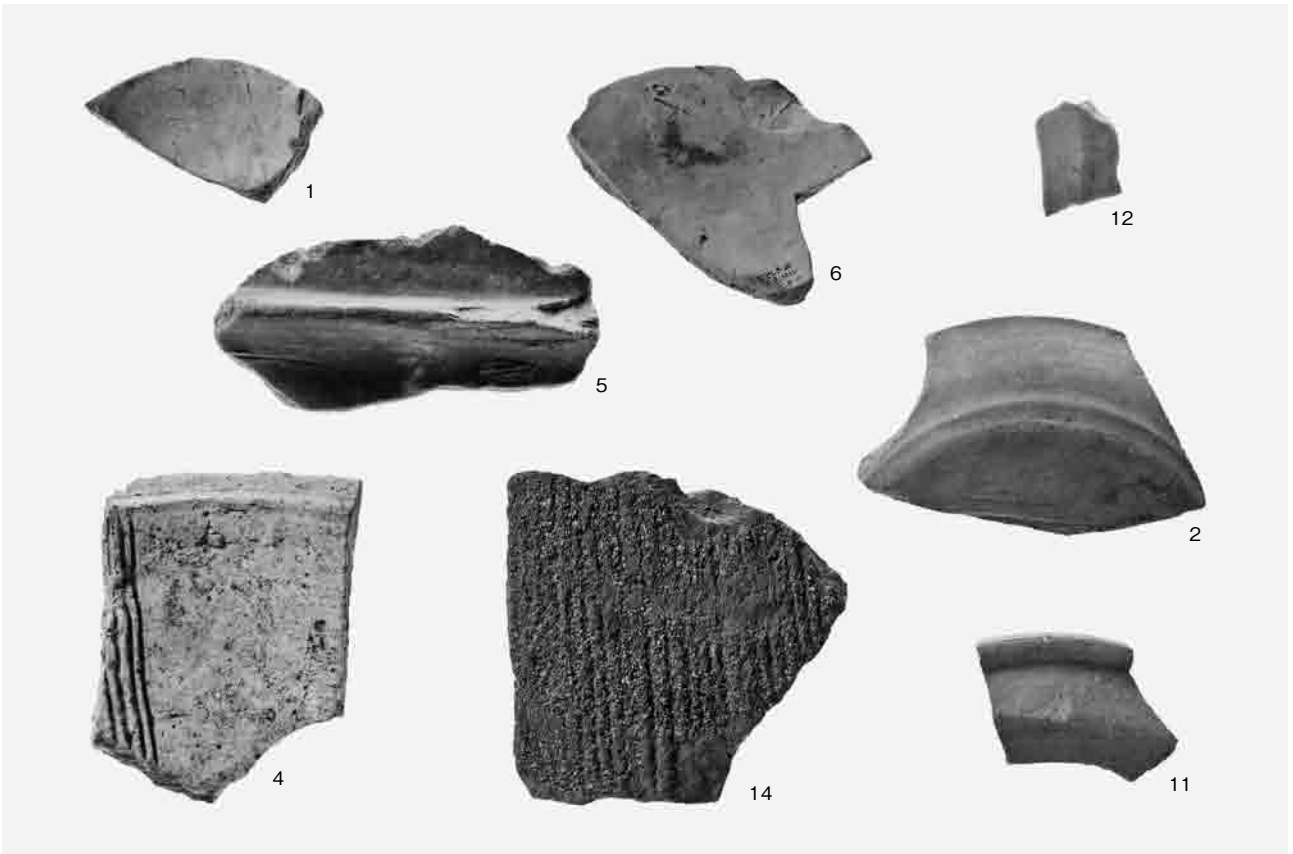
(2) 第9トレンチ南壁土層断面
(北から)



(3) 第10トレンチ全景(北から)



(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2